

日本語教員養成課程における大学生の 模擬授業に対する意識及び意識構造

——日本語教育における模擬授業力向上のための方法論的模索——

河崎 絵美

1. はじめに

本学における日本語教員養成課程は、本年度で17年目を迎えている。日本語教員養成課程が開講されてから今日に至るまでに、卒業後の進路として日本語教師を目指す学生は年々増加傾向にあり、実際に日本語教師として教鞭をふるう学生たちの職場は国内外に広がりを見せている。一口に日本語教師といっても様々で、公的機関である独立行政法人国際協力機構（JICA）や独立行政法人国際交流基金（JF）で日本語教師として勤務するもの、海外の大学で日本語学科の専任講師として勤務するもの、国内の日本語学校で専任講師や非常勤講師として勤務するもの、大学院へ進学するもの、中には日本語教員養成課程を開講する役を担う会社員として勤務しているものまで仕事の幅は広がってきている。

本学の日本語教員養成課程の内、実践（模擬授業）を行う必須科目に「日本語教授法1」「日本語教授法2」「日本語教授法3」「日本語教授法4」が設定されている。これらの科目は受講者数により、グループ作業が主体となっている。なお、日本語教員養成課程を修了するためには合計4回の教案作成および模擬授業を行うことが課される。多くの学生たちにとっては、教材分析や教案作成、模擬授業を行うということは初めての経験であり、加えて初めて出会う者同士のグループ作業は、精神的な負担が大きいものと思われる。近年の大学生の実態として増加傾向にあるのが、グループ活動が苦手、自分の意見を相手にうまく伝えられない、コミュニケーションを図ることが苦手、といったタイプの学生たちである。本学でもそのような学生が少なからず見受けられる。しかし、合計15回の講義のうち、その大半が模擬授業へ向けたグループ作業を行う本講義では、模擬授業が近づくにつれて学生たちからは不安の声がもれる。もちろん、講義中に教員に自由にアドバイスを求めることは可能である。また、教員による毎時間の進捗状況の確認も行われ、その都度学生たちへの指導は行われ

ている。学生たちの大半は、日本人大学生であり今日まで日本語を何不自由なく用いた生活を送ってきている。そのような学生たちがこの講義を機に、これまで当たり前で使用していた日本語を客観的に捉え、その言葉や文法構造について考える活動を行う。普段意識したことのない日本語の構造について教師から課題を課された時、あるいは、そうした課題をいくつも課されることを繰り返した学生達の「日本語」に対する意識構造とは、どのようなものなのだろうか。

本研究では、日本語教員養成課程を履修する大学生の「模擬授業に対する意識」および「意識構造」を、「日本語全般の日本語に対する意識」と「日本語を教授することに対する意識」とに大別し、自信の程度を分析することを目的とする。

具体的には、模擬授業を行う大学生たちが自分たちの日本語教育にどの程度の自信を持ち、何に不安を抱いているのかを明らかにし、今後の授業計画に役立てることである。

2. 研究目的

模擬授業とは、日本語教員養成のためには意義のある、また価値のある授業である一方で、日本語教員にとって不可欠な授業と位置づけている本講義を、より充実した内容にするために、「受講者の日本語に対する苦手意識」と「日本語を教授することに対する苦手意識」を明らかにする。具体的には、模擬授業を行う際の意識や意識構造について質問紙調査を行い、その特質を明らかにすることにある。これらを明らかにすることで、今後の日本語教員養成課程に関する模擬授業を行う際の有効な授業プログラム構成のための基礎的な知見を得ることができると期待される。

3. 研究方法

本学の日本語教員養成課程を受講する31名（主として1年生）を調査対象として、2018年7月末（模擬授業当日）に質問紙調査を行った。なお、この「日本語教授法1」は日本語教員養成課程取得のために本学科で必須科目として設定している科目である。

3-1. 被験者

日本語教員養成課程受講者の内、「日本語教授法1」を受講する大学生26人（男11人、女15人）、2年生2人、1年生24人、模擬授業経験者0人

3-2. 調査期日

2018年7月2日～2018年7月23日

3-3. 質問紙

本質問紙は板橋（2016）、倉知・大下・森井（2018）を参考に作成している。具体的には、被験者全員を対象に、日本語教育全般の意識を問う質問紙は倉知・大下・森井（2018）を参考に①日本語教育全般に対する意識、②授業計画および教材分析の得意さを教える自信、③日本語教員養成課程の各分野に対する自信、④日常生活における日本語教育に関する経験の有無の5つで構成した。

一方、模擬授業の学生たちの振り返り度を問う質問紙は、板橋（2016）を参考に発表者と見学者に分けて質問紙を作成した。回答は「1. 全く思わない 2. 思わない 3. 少し思う 4. 思う 5. 強く思う」の5段階で評価をした。

3-4. 手続き

模擬授業初日、授業に出席している全学生に対し、日本語教育全般に関する質問紙を配布し回答を得た。その後、模擬授業を行った。模擬授業終了後は、発表者に対しては自己評価尺度に関する質問紙を配布し、見学者に対しては授業評価尺度に関する質問紙を配布し、回答を得た。その際、成績に影響がないことを伝え、素直な気持ちを記入するよう注意を促した。

4. 「日本語教授法1」のカリキュラム詳細について

表1には、2017年度の「日本語教授法1」におけるテーマの一覧を示す。この授業では、先述した通り、実践的な授業を行う。

第1回のガイダンスでは、日本語教師に必要な条件を示し、日本語教育を必要とする学習者の多様なニーズについて、いくつかの事例を参考に知ることを目的としている。そこから日本語教師の役割について自分なりの考えを持ち、日本語教員養成課程を受講するために知っておくべき日本語教育の現状と課題を示した。

第2回では、普段何気なく使用している日本語を客観的に捉えることを促した。微妙な日本語のニュアンスや言い回し、あるいは「語彙」そのものを日本語学習者に伝えるためには、どのような表現や言葉を用いるのが良いのかをグループで話し合った。

第3回では、現在どの国の方がどのような理由で日本語を学習しているのかをデータを元に知った。また、日本国内で日本語学習を必要としている外国人児童生徒や技能実習生についても紹介し、国語教育と日本語教育についての違いを周知した。

第4回では、日本における日本語教育の始まりとその背景について紹介し、当時の教授法から現代の教授法に至るまでを紹介した。様々な教授法のメリットやデメリットについて紹介した。

第5回では、地域日本語教室からボランティア理事に講演を依頼した。ここでは、学校教育と地域ボランティア教室で扱う日本語教育の違いについて活動を通じた紹介をしていただいた。

第6回からは、模擬授業発表に向けての活動が開始となる。この回では、1コマ90分の授業を想定した学習項目の整理方法、学習目標の立て方をグループで考え、まとめた。

第7回では、教科書をはじめとする教材や副教材、レアリアをどのように使用すると効果的なのかをグループで考え、発表した。

第8回では、シナリオ教案の書き方を学習した。授業中に発言する教師の言葉は、すべて初級文型表現で書くことを徹底し、教師の活動を書くための既習語彙および文型表現をグループで整理した。また、学習者の活動の欄には授業中に学習者がより声を出す機会を設ける工夫をすることを提案し、グループで活動内容を考えた。

第9回からは、各グループがオリジナリティを迫及し、グループで教案作成を行う。授業中に疑問に思ったことや、意見が分かれた場合のアドバイスはその都度、教員に問うことができるようにした。教員は各グループ、最低でも2回は進捗状況の確認を行った。

第10回、第11回、第12回は、第9回同様、各自で作業を進めた。

第13回からは模擬授業を行った。発表者はパワーポイントやレアリアを駆使し、完成した教案をもとに模擬授業を行った。クラスの6、7人は学習者役を演じた。模擬授業を見学している人は、そのグループの授業評価を行い、発表後に意見交換を行った。併せて、教員による評価、および質疑応答も行った。

第14回、15回は、第13回同様、模擬授業を行った。

表1 「日本語教授法1 (2017年度版)」内容一覧

	分野	テーマ
第1回		ガイダンス
第2回	日本語	当たり前の日本語を伝える
第3回	日本語	日本語教育について
第4回	日本語	日本語教育の歴史と教授法
第5回	日本語	地域日本語教室
第6回	模擬授業	授業の組み立て方
第7回	模擬授業	教材分析
第8回	模擬授業	教案の書き方
第9回	模擬授業	教案作成1
第10回	模擬授業	教案作成2
第11回	模擬授業	教案作成3
第12回	模擬授業	教案作成4
第13回	模擬授業	模擬授業1
第14回	模擬授業	模擬授業2
第15回	模擬授業	模擬授業3

5. 結果及び考察

各問いに対し、「1. 全く思わない 2. 思わない 3. 少し思う 4. 思う 5. 強く思う」の5段階で評価をもらった。

(1) 日本語全般に対する意識について

調査結果を図1に示す。

日本語の勉強は大切だと思う」という設問に対して「1. 全く思わない」「2. 思わない」は0人、「3. 少し思う」が3人、「4. そう思う」が14人、「5. 強く思う」が10人という結果であった。多くの学生にとって、日本語を学ぶことは必要なことであるということが明らかとなった。

「①日本語が好きだ」とう設問に対してでは、「1. 全く思わない」が0人、「2. 思わない」は2人、「3. 少し思う」が1人、「4. 思う」が10人、

日本語全般に対する意識

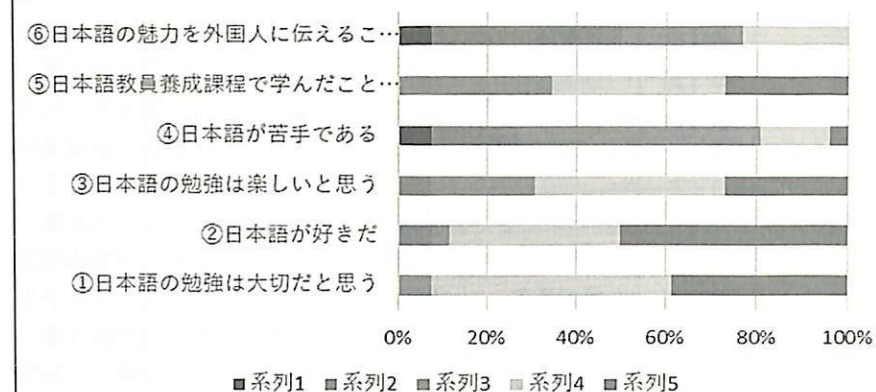


図1 日本語全般に対する意識

「5. 強く思う」が13人であった。学生の大半が日本語を肯定的に捉え、好意的であることが明らかとなった。

「②日本語の勉強は楽しいと思う」という設問に対して、「1. 全く思わない」が0人、「2. 思わない」が2人、「3. 少し思う」が6人、「4. 思う」が11人、「5. 強く思う」が7人であった。多くの学生が日本語の学習を肯定的に捉えていることが明らかとなった。受講生にとって、これまで何の疑問を抱くことなく使用してきた日本語を改めて考えることの重要性や、日本語と向き合うことで新たな発見や気づきを得ていることから肯定的な結果となったのではないかと推測される。

「③日本語が苦手である」という設問に対しては、「1. 全く思わない」が2人、「2. 思わない」が5人、「3. 少し思う」が14人、「4. 思う」が4人、「5. 強く思う」が1人という結果であった。この設問では、日本語が少し苦手だと思うという回答が最も多かった。「③日本語の勉強は楽しい」という項目では、日本語の勉強が楽しいと思う学生が多いのに対し、楽しいが実際に言葉と向き合うと、急に難しいという思いが強くなり、苦手意識を生み出しているのではないだろうか。ここに学習の摩擦が生じていることが明らかとなった。

「④日本語教員養成課程で学んだことは日常生活で役立つと思う」という設

問に対し、「1. 全く思わない」と「2. 思わない」は0人、「3. 少し思う」は9人、「4. 思う」は10人、「5. 強く思う」は7人であった。受講生の大半は、何かしら授業で学んだことが実生活面で役にたったという経験をしたということがこの結果から推測することができる。しかし、具体的に何が役にたったのかということは、今後の課題となるが学校場面と生活場面での学びの共有ができているということは、本課程の有意義な価値を示すものであると考える。

「⑤日本語の魅力を外国人に伝えることに自信がある」という設問に対し、「1. 全く思わない」が2人、「2. 思わない」が11人、「3. 少し思う」が7人、「4. 思う」が6人、「5. 強く思う」が0人であった。この結果は、日本語についての自身の知識不足に加え、外国人へ日本語を教授する術を十分に理解できていないことによる不安ではないかと推測する。この結果に関しては、日本語教員養成課程を修了する際には「5. 強く思う」の回答率が高まることを期待する。

(2) 分析・模擬授業の得意さと教える自信について

調査結果を図2に示す。

ここでは、日本語の教材を分析することに対して苦手意識を持たずに取り組むことができているかということを明らかにし、最終的な模擬授業では自分たちの準備した教案を信じ、自信をもって取り組むことができたかどうかを明らかにする。

「⑥教材分析や教案作成を行うことが楽しい」という設問に対し、「1. 全く思わない」は0人、「2. 思わない」は10人、「3. 少し思う」は12人、「4. 思う」は3人、「5. 強く思う」は1人であった。この結果は、初めて取り組む教材分析に加え、初めて出会ったクラスメイトとのグループ作業という点で、かなりの精神的な負担があったのではないかと推測される。途中、欠席や遅刻で作業が滞り、グループ内で無事に模擬授業発表日が迎えられるのか不安だともうすグループもあった。またグループ作業が不得意な様子の学生も見受けられたのも事実である。つまり、教材分析や教案作成が楽しいと思えるか思えないかという判断基準には、グループ内での人間関係も少なからず影響を与える可能性が考えられる。これについては今後の課題である。しかし、単純に何を採り上げ、何を教授するかを考えるためには、ある程度の「慣れ」も必要である。よって、今回の講義では「できる」「わかる」「やってみたい」という学

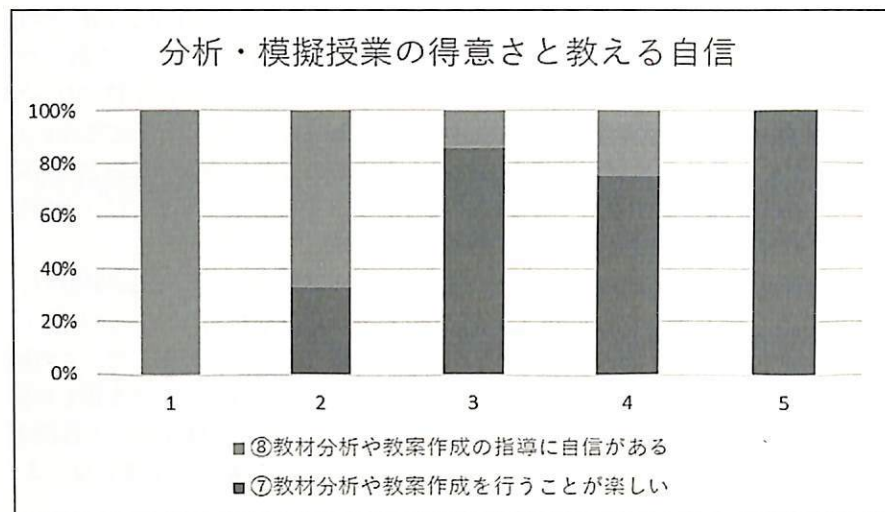


図2 分析・模擬授業の得意さと教える自信

生にとって不安要素のない教師の働きかけが必要であると思われる。そうすることで、学生たちの回答が、より楽しいという評価に繋がるのではないだろうか。

「⑦教材分析や教案作成の指導に自信がある」の設問に対し、「1. 全く思わない」は3人、「2. 思わない」は20人、「3. 少し思う」は2人「4. 思う」は1人、「5. 強く思う」は0人だった。多くの場合、自信を持つことができないまま模擬授業に挑んだという結果である。これに対しては、カリキュラムにある教案作成時間を増やし、中間発表日を設けるなどの工夫により改善を試みたい。それにより、自信を持たせることができると思われる。

(3) 日本語教育の各分野に対する自信について

調査結果を図3に示す。

「⑧文字や語彙の指導に自信がある」の設問に対し、「1. 全く思わない」は0人、「2. 思わない」は19人、「3. 少し思う」は7人、「4. 思う」は0人、「5. 強く思う」は0人であった。多くの場合、自信を持っていないことが明らかとなった。初級クラスで日本語を教える場合、その説明に用いる日本語も既習の語彙および文型表現に限られてしまう。また英

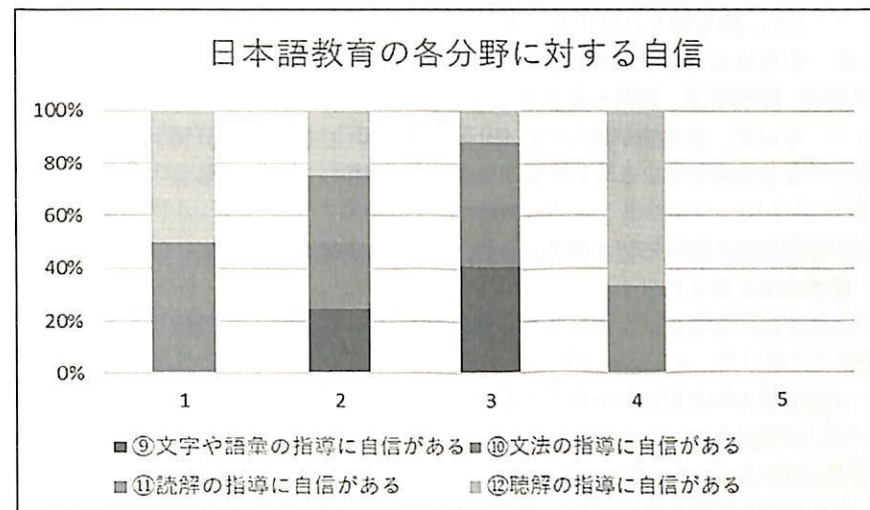


図3 日本語教育の各分野に対する自信

語が必ずしも学習者全員に伝わるものでないことを想定しているため、どこまでが既習でどのように伝えと良いのかが整理できていないのであろうと思われる。そのため、それが自信のなさに繋がっているのである。これに関しては、教師による各授業時間での指導を増やすことにより改善できると思われる。

「⑨文法の指導に自信がある」の設問に対し、「1. 全く思わない」は2人、「2. 思わない」は19人、「3. 少し思う」は4人、「4. 思う」は0人、「5. 強く思う」は0人であった。結果として、自信を持っていないことが明らかとなった。これは、「⑧文字や語彙の指導に自信がある」と同様のことが言える。

「⑩読解の指導に自信がある」の設問に対し、「1. 全く思わない」は0人、「2. 思わない」は20人、「3. 少し思う」は4人、「4. 思う」は1人、「5. 強く思う」は0人であった。読解の指導においても文字語彙や文法同様に自信のなさが明らかとなった。しかし、文字語彙や文法では「4. 思う」が0人であったが、読解では1人の学生が「4. 思う」を評価していることに注目したい。

「⑪聴解の指導に自信がある」の設問に対し、「1. 全く思わない」は2人、「2. 思わない」は19人、「3. 少し思う」は2人、「4. 思う」は2人、

「5. 強く思う」は0人であった。聴解の指導においても自信を持っていないことが明らかとなった。

授業では、語彙や文法を中心に扱い、読解や聴解を扱うことはしていないが、学生達が扱っていない分野においても扱った分野同様の自信のなさを感じているということは考える課題の一つとなる。

(4) 日常生活における日本語教育に関する経験の有無について

調査結果を図4に示す。

ここでは、日常生活における日本語教育に関する経験の有無について調査した。

「⑫外国人の友人が多いほうだと思う」という設問に対し、「1. 全く思わない」が9人、「2. 思わない」が9人、「3. 少し思う」4人、「4. 思う」が3人、「5. 強く思う」が0人であった。

「⑬外国人に日本語について質問をされることが多いほうだと思う」という設問に対し、「1. 全く思わない」が8人、「2. 思わない」が10人、「3. 少し思う」が7人、「4. 思う」と「5. 強く思う」が0人であった。

「⑭国際交流活動に積極的に参加していると思う」という設問に対し、「1. 全く思わない」が4人、「2. 思わない」が8人、「3. 少し思う」が9

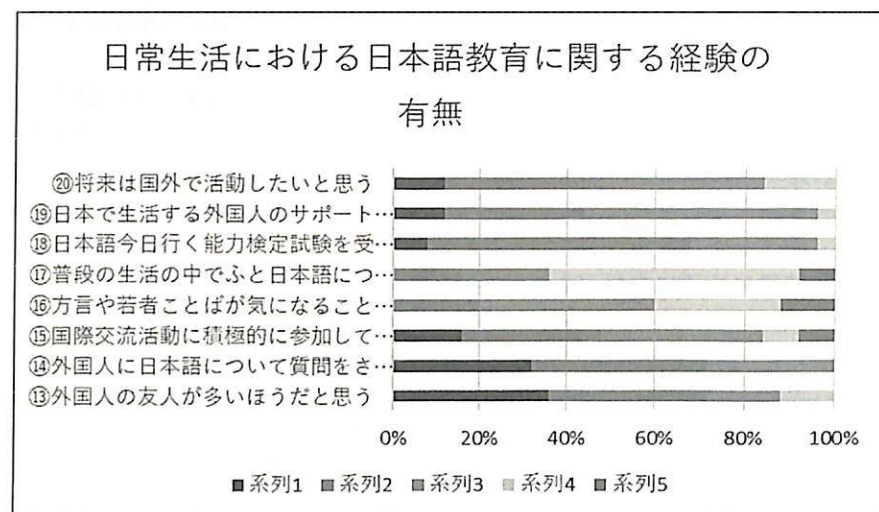


図4 日常生活における日本語教育に関する経験の有無

人、「4. 思う」が2人、「5. 強く思う」が2人であった。

「⑮方言や若者ことばが気になることがある」という設問に対し、「1. 全く思わない」が0人、「2. 思わない」が5人、「3. 少し思う」が10人、「4. 思う」が7人、「5. 強く思う」が3人であった。

「⑯普段の生活の中でふと日本語について疑問に思うことがある」という設問に対し、「1. 全く思わない」が0人、「2. 思わない」が4人、「3. 少し思う」が5人、「4. 思う」が14人、「5. 強く思う」が2人であった。

「⑰日本語教育能力検定試験を受ける自信がある」という設問に対し、「1. 全く思わない」が2人、「2. 思わない」が15人、「3. 少し思う」が7人、「4. 思う」が1人、「5. 強く思う」が0人であった。

「⑱日本で生活する外国人のサポートをする自信がある」という設問に対し、「1. 全く思わない」が3人、「2. 思わない」が8人、「3. 少し思う」が13人、「4. 思う」が1人、「5. 強く思う」が0人であった。

「⑲将来は国外で活動したいと思う」という設問に対し、「1. 全く思わない」が3人、「2. 思わない」が8人、「3. 少し思う」が10人、「4. 思う」が4人、「5. 強く思う」が0人であった。

以上の結果から、普段の生活でふと方言や若者ことばについて気になる経験を学生全員が経験しているのに対し、「⑬外国人の友人が多い方だと思う」という問いに約40%が否定的な回答である。

6. まとめ

学生たちの多くは、自身が日本語を学ぶことに対しては肯定的に捉えているが、日本語を教授することに対しては自信がないことが明らかとなった。また、日本語をどのような手順で何を教授すべきなのかに対しても自信がなく、教材研究や教案作成に対する苦手意識が高いことが明らかとなった。

これらの結果に対し、大学生の苦手意識の根底には日本語そのものを「外国語」として捉える力に乏しいことが第一に挙げられる。具体的言うと、自身の日本語に対する興味や自信はある程度持てるものの、外国語として意識すると、たちまち「日本語」が分からなくなるということである。この意識構造を把握し、講義の中で「世界の中の一言語に日本語がある」ことを再認識させ、母語の習得や第二言語習得の理論的な部分に触れることで苦手意識を克服できるのではないかと考える。この点に関しては、日本語教員養成課程での他科目との

連携を強化し、本科目の講義内容を見直す必要が見出せた。

教師は、日本語を客観的に捉えるための発問や教材を準備し、これまで当たり前だった日本語について考えさせるための働きかけを工夫する必要がある。また、教師のこの働きかけを機に受講者自らが客観的に日本語を捉え、母語修得と第二言語習得の「言語習得」について考える力を養うよう方向付けることが必要である。毎時間のこの意識構造のコントロールが、つまりは日本語教育者としての最良の糧となるのではないだろうか。

参考文献

- 倉知典弘・大下浩司・森井康幸（2018）「授業力向上に向けた模擬授業改善の試み—授業評価尺度の作成と有用性の検討—」吉備国際大学研究紀要（人文・社会科学系）第28号，143-156.
- 金子元久（2012）「大学教育と学生の成長」名古屋高等教育研究 第12号，211-236.
- 遠山孝司（2011）「教員志望の大学生が初めて模擬授業において緊張する要因」日心第75回大会 教育 2 E V112